

The Professor's House と第一次世界大戦： 異常時下における常態の認識

The Professor's House and the World War I:
Recognition of Consistency under the Abnormal Situation

太 田 直 子

OHTA Naoko

I

第一次世界大戦開戦から100年、20世紀における二つの世界大戦が再検証されている。1914年に勃発した第一次世界大戦は、世界地図を大きく塗り替え、経済、外交の分布図は、英国の植民地にすぎなかった小国アメリカ合衆国が、20世紀の一大強国になった事を示した。第一次世界大戦がアメリカ文学に及ぼした影響は、経済や外交がアメリカにもたらしたそれと劣らず大きく、多くのアメリカ人作家は、直接・間接的にこの戦争の産物であったと言っても過言ではない。いわゆる“Lost Generation”の多くの若いアメリカ男性文人が、世界の作家となって国の内外でその名をなした。しかし、常に“War Novel”は男性が描くものであり“Writing about war has long been considered exclusively a masculine prerogative.”¹⁾そして第一次世界大戦を分岐点に“...it became the prerogative not just of men but of male combatants”²⁾と担い手の範囲はさらに狭くなっていった。第一次世界大戦が、いわゆる「男性文学確立」の分岐点であったとするならば、Willa Catherの*One of Ours* (1922) はそれに挑んだ挑戦的作品あったといえよう。

Willa Catherは、1912年39歳の時に処女作*The Alexander Bridge*を発表した。彼女は自らの作品を“studio picture,” “genuine, but very shallow”³⁾と語るが、翌年、Houghton Mifflinで発刊された*O Pioneer!*でCatherは作家としての自らの方向性を見いだしたといえよう。後にCather自身が“our feet find the road home on a dark night”⁴⁾と述べているが、この作品はむしろヨーロッパ文学界で認められCather文学の方向性を決めた作品であるといえる。1年後の1914年、第一次世界大戦が勃発し、1917年にはアメリカが参戦した。Catherはこの戦争に対して心を痛め多くを語らなかったという。⁵⁾フランスをこよなく愛していたCatherは当時の多くのアメリカ国民と同じように、ドイツ帝国の脅威を“artistically and emotionally”⁶⁾に受け止めたといわれている。しかし何よりも、1918年5月の従兄弟Grosvenor P. Catherの戦死は、Catherに個人的打撃を与えた。夏に彼の母のもとに滞在し、戦争時に

定期的に送られてきた手紙を読んだCatherは、手紙の中にあふれる彼の“the sense of exuberant self-fulfillment”に感動して“a similarly dissatisfied Nebraskan, who finds release and then death amid the Great Adventure”⁷⁾を主人公とした小説*One of Ours*を書く決心をしたのである。1918年11月に戦争が終結した後、*One of Ours*を完成させるためにもヨーロッパを訪問すべきだと考えたCatherは、1920年、大戦の戦跡を訪ねGrosvenorの墓を探しあてた。帰国後も帰還兵に話を聞くなど4年をかけて執筆を行い、1922年9月に*One of Ours*を出版した。

出版と同時にベストセラーとなったものの、小説は“the world of criticism on *One of Ours* broke in two”⁸⁾と議論的になり“a woman’s war novel”⁹⁾と酷評された。H. L. Menckenをはじめ、数多くの批評家や作家はこの作品を批判したが、1923年5月に彼女はPulitzer賞を受賞した。受賞を受けてErnest Hemingwayは“Poor woman, she had to get her war experience somewhere”と*One of Ours*を“a naïve romanticization of The Great War”¹⁰⁾として片付け、War Novelとしての価値を認めなかった。

第一次世界大戦に従事したアメリカ男性は、戦争経験のない父親をもち、祖父・曾祖父らの南北戦争の武勇伝を聞いて成長した世代である。彼らは戦争を“a holiday”, “The war was godsend.”¹¹⁾と考えた祖父や曾祖父の経験した戦争へと向かっていったが、大戦の戦場は語り継がれた理想的な世界とは違っていた。そして、“The Great War”を語ることができるのはその現実を知る者でなければならず、戦闘を知らないアメリカ本土で暮らす女性に描くことはできないというのが彼らの共通の認識であった。Catherは主人公Claudeの戦死する様を克明に描いた。彼女のこの行為はすなわち男性の聖地に土足で踏みこんだ結果であり、その聖地は不可侵であるべきだとする男性の世論に反するものであったのだ。酷評を受けた*One of Ours*についてCather自身は、“‘In my opinion, *One of Ours* has more of value in it than any one of the others.’”¹²⁾とFlora Merrillとのインタビューの中でこのように主張しているが、Edith Lewisが述べた言葉“*In One of Ours* she did not choose the war as a theme, and then set out to interpret it through the experience of one individual.”¹³⁾は、Catherの立場と作品の正当性を代弁しているように思われる。一方で、*One of Ours*はCatherに経済的な安定をもたらし、これを契機に彼女は作家としての活動を活発にしていく。

*One of Ours*に対する男性社会からの酷評は別として、Catherが“the world broke in two in 1922 or thereabouts”¹⁴⁾と語ったことは有名な話であるが、戦争とそしてその後に繰り広げられた狂乱の時代が人々にもたらしたものが20年代の小説のテーマになっていることは周知の事実である。第一次世界大戦開戦から約10年、そして20年代の折り返し地点でもある1925年は、時代と戦争の関係を分析するに際して注目すべき年であろう。この年、アメリカ自然主義小説の集大成とも目されたTheodore Dreiserの*An American Tragedy*が出版され、また20年代の寵児ともいえるべきF. S. Fitzgeraldが*The Great Gatsby*を発表した。さ

らにGertrude Steinの*The Making of Americans*, Ezra Poundの*The Cantos*など数多くの注目すべき作品も出版されているが、狂乱の時代の真只中で描かれたこれらの作品は、現在の常態を描くことによってその「異常」を表現しているが、希望に満ちた結末を迎えたと言える物はほぼない。同時期に大戦を経験しヨーロッパへと渡ったHemingwayやFaulknerなどは、本国に戻り本格的に作品を執筆・発表していく。Faulknerは*Sartoris*で、戦争に生きる場所を求め、そして帰還した故郷で息苦しさを感じたYoung Bayardを描き、彼を取り巻く女性達に“to make money, the war was a pretty good thing”¹⁵⁾と語らせ、20年代のアメリカの変化を敏感に感じ、戦争によって過去の常態に囚われた人物を通して現在の「異常」を描き出している。20年代はアメリカ小説が世界的文学小説へと羽ばたいたスタート地点といってもいいが、その中で、1925年はアメリカの「異常」を描く視点の変革期ともいえる。

小論では、1925年に出版されたWilla Cather(1873-1947)の*The Professor's House*に焦点をあて、同年に発表されたS. F. Fitzgeraldの*The Great Gatsby*と比較しながら、作品と戦争の関係を通して、常態からみる「異常」を考察する。

II

Pulitzer賞の受賞後、Catherはさらに個人的経験を書き続けていく。Edith Lewisが“I think, the most personal of Willa Cather's novels.”¹⁶⁾と言う*The Professor's House*が1925年に発表された。“The Family” “Tom Outland's Story” “The Professor”の3部で構成されているこの小説は、“Tom Outland's Story”を元に創作されたという。“... inserting the *Nouvelle* into the *Roman*”¹⁷⁾とCatherは“Tom Outland's Story”を使ってこの作品で新しい形式を試している。パリの展覧会でみた“old and modern Dutch paintings”の“a square window, open”からながめる風景を描くべく、彼女は個人的経験を形式の中に書き込んでいった。しかし、“Alfred Kazinは*The Professor's House*が過小評価されているとしながらも“The violence with which she broke the book in half to tell the long and discursive narrative of Tom Outland's boyhood in the Southwest was technical mistake. . . .”¹⁸⁾と作品の中におけるTom Outlandの語りを疑問視している。

*The Professor's House*には53歳の大学教授Godfrey St. Peterを中心に、彼の家族の生活が描かれている。“The moving was over and done.”¹⁹⁾という1文で始まり、新居の完成とともに一家の新しい生活が始まることが告げられて物語が始まるが、1章と3章では、古い借家と新居、結婚前と結婚後、*Spanish Adventure*の執筆前と執筆後と、主人公St. Peterの人生における新旧を対比しながら現在のSt. Peterの物語が語られていく。そしてA. Kazinが問題視する第2章“Tom Outland's Story”で、Tom Outlandの生前の物語が一人称のTomの語りで挿入されている。まったく別の視点で書かれた2章は、作品の現在において登場しないTomの存在を事実として読者に立証することはもちろん、第1章・3章で描かれたSt.

Peter一家の現在が、このTom Outlandの存在の上に成り立っていることを証明する重要な章になっている。Tom Outlandの語る2章が作品の過去と現在（新旧）の布石となり、作品全体の新旧の線引きがTomの死でなされていることがわかる。

しかし、第一次大戦へ従軍するためにHamiltonを離れるTomについての描写は、あまりにも簡単で、彼が戦争に行く理由も読者が納得できるものではない。

Outland was delayed by the formalities of securing his patent, and then came August, 1914. Father Duchene, the missionary priest had been Tom's teacher, stopped in Hamilton on his way back to Belgium, hurrying home to serve in any capacity he might. The rugged old man stayed in Hamilton only four days, but in that time Outland made up his mind, had a will drawn, packed, and said good-bye. He sailed with Father Duchene on the *Rochambeau*.

(235-6)

何が彼を戦争へと駆り立てたのか。Tomはすべてを捨ててFather Ducheneと共に戦地へと向かう決心をし、そして自分の死を予測するかのように残言を残して姿を消してしまう。読者は生前のTomがHamiltonで何を発明し、そして何を捨てたのかを彼の語りで知る事はできない。その概要は、Tomのことを全く知らないSt. Peterの長女Rosamondの夫Louie Marsellusが、英国からの訪問者Sir Edgarに説明する場面で明らかになる。

“...Tom Outland, a brilliant young American scientist and inventor, who was killed in Flanders, fighting with the Foreign Legion, the second year of the war, when he was barely thirty years of age. Before he dashed off to the front, this youngster had discovered the principle of the Outland vacuum, worked out the construction of the Outland engine that is revolutionizing aviation. He not only invented it, but curiously enough for such a hot-headed fellow, had taken pains to protect it by patent.”(30)

Marsellusは、はじめて会う人に自分の妻の事を、“My wife was young Outland's fiancée—is virtually his widow.”(30) と言い切ってしまう男である。しかし、“I never think of him as a rival.”(145) “I think of him as a brother, and adored and gifted brother.”(145) とTomについてSt. Peterに語るMarsellusの言葉には、彼の屈託のない想いが込められている。なぜならばMarsellusにとってTomは実存する人物ではなく、自分の富と成功

そのものであるからだ。物質主義・営利主義の代表とされる Marsellus の姿を Cather も “There was nothing Semitic about his countenance except his nose—” (32) と描写し、読者にある種の偏見を植え付ける事を忘れていない。しかし、“Outland got nothing out of it but death and glory. Naturally, we feel terribly indebted.” (31) と言い切れる Marsellus の言動は、Outland の遺功に嫉妬や後ろめたさを感じながらもそれにしがみつきたいと願っている他の登場人物よりも潔くそして生産的である。何よりも

“...Toward the close of the war we began to sense the importance of what Outland had been doing in his laboratory—I am an electrical engineer by profession. We called in the assistance of experts and got the idea over from the laboratory to the trade. The monetary returns have been and are, of course, large.” (30)

と語る Marsellus の姿は、戦後のアメリカの姿を彷彿とさせるものである。富を得たことに自信をもちそれを漲らせた姿が人々の反感を買おうとも、彼の言動はぶれない。しかし、彼がよかれと思うすべての善意は人々の怒りの対象となってしまう。常に彼の行動は富で裏付けられたものと判断され、人々はその後ろに常に Tom の存在を見ってしまうのである。

Marsellus への批判をさらに高めていく要因はその妻にあるのかもしれない。St. Peter の長女 Rosamond は Tom の遺産の相続人となり、彼の研究のすべてを継承することになる。Tom の発明に対する専門的知識がない Rosamond は、Marsellus と結婚することによって Tom の発明を価値あるものにする事ができ、莫大な富を得、その金に裏打ちされた派手な姿と高慢とも思えるその言動は妹の Kathleen には特に許しがたいものに思え、そのことによって姉妹の溝が深まっていく。姉の “good looks and good taste.” (70) を誇りにしていた Kathleen は、金によって変わってしまった姉に対する憤りを父にぶつけている。

“Even if I have, why should she be revengeful? Does she think nobody else calls him a Jew? Does she think it's a secret? I don't mind being called a Gentile.” (70)

姉への憎しみをユダヤ人の夫に転嫁してそして消化しようとする Kathleen の姿勢は、昔の姉を肯定し、怒りを他民族へ転嫁したものであり、アメリカにおけるユダヤ人へ偏見と重なりこの時代を反映するアメリカの価値判断を示している。しかし、Kathleen が憎しみの対象とする姉の価値観の変化は、同時に Kathleen 自身の価値観が変化してしまったことであることに彼女は気がついていない。

偏見と価値判断の基準がずれてしまったことを認識できない人物の言動ではなく、

Marsellusの言動を詳細に見ていくと、さらに興味深いことがわかってくる。Marsellusは、

“...you see it happens that the date of your lecture engagement at the University of Chicago is coincident with her birthday, so I have planned that we shall all go down together. And among other diversions, we shall attend your lectures.”(62)

と、St. Peter夫妻のためにシカゴへ同行し、夫婦の思い出のオペラ *Mignon* の予約をし、そして窓から雪の美しい風景が見える豪華なホテルの部屋を用意した。夫妻への細かい心遣いは的を得た物であり、その言動から彼の好意が儀礼的なものと判断することはできない。逆に、心から尽くす理想的な義理の息子としてのMarsellusの姿が浮かび上がってくる。さらにLouieは夏にフランス旅行への招待を提案する。

“it is to be our excursion, from Hamilton back to Hamilton. We’ll travel down to Biarritz for a little fashionable life, and stop at Marseilles to see your foster-brother, Charles Thierault. The rest of the summer we’ll lead a scholarly life in Paris. . . .”(137)

心地よく快適であることがわかる旅への誘いに対して、St. Peterは“Well, Louie, it’s a tempting idea, and I’ll think it over. I’ll see whether I can arrange any work.”(139) と“he would never be one of this light-hearted expedition”(139) と認識しながらも曖昧な答えする。この誘いを断る正当性を考えようと試みながら、St. Peterはもはや自分が家族から必要とされていない“he would not be needed”(139) ことを確信してMarsellusが自分の妻への愛をも担うことができる代役であると考えた。“He could trust Louie to take every care of Lillian, and nobody could please her more than her son-in-law. *Beaux-fils*, apparently, were meant by Providence to take the husband’s place when husbands had ceased to be lovers.”(140)

St. Peterは妻Lillianの特性を理解していると考えている。“With her really radiant charm, she had a very interesting mind—but it was quite wrong to call it mind, the connotation was false. . . .What he had was richly endowed nature that responded strongly to life and art, and very vehement likes and dislikes”(38) そして、妻は知的というよりは情熱的だと理解した上で彼は彼女を愛し共に生活をおくっていった。教授職という金銭的にめぐまれない生活の中で、彼女は父から受け継いだ1,600ドルの収入で他の教授夫人とは異なる毅然たる態度を保持していたことをSt. Peterは理解し納得している。その収入によって裏付けられた妻の虚栄を黙認し、そこまでを許容範囲としていたが、

Marsellusの存在によりLillianの秘められた情熱的側面が強調され、St. Peterの許容範囲を超えてしまったことに、彼は気がついたのである。

Since Rosamond's marriage to Marsellus, both she and her mother
had changed bewilderingly in some respects—changed and hardened.
But Louie, who had done the damage, had not damaged himself.(140)

わずかな父からの収入で保たれていたLillianの虚栄心を許す事ができても、St. Peterは自分の賞金とMarsellusの影響で強化された彼女の世俗性を許す事ができない。

That worldliness, that willingness to get the most out of occasions
and people, which had developed so strongly in Lillian in the last
few years, seemed to Louie as natural and proper as it seemed
unnatural to Godfrey.(140)

妻の世俗性と積極性はSt. Peterの基準から逸脱して、Marsellusの持つ基準の範疇に入ったことをSt. Peterは認識してしまった。

このように家族の変化をMarsellusの姿を通して認識したSt. Peterであるが、その変化の原因ともいうべき義理の息子Marsellusを嫌い、そして否定してはいない。彼はMarsellusの行動が他の人物の反感を買っていることを十分に理解しながら、“I couldn't possibly take any of Outland's money.”(48) “. . . we mustn't behave as if we did want it.”(72)と、あくまでもOutland Engineの利益が自分のものではないと主張しつつ、自分がこの利益の配当を得ようと画策する人物の調停役になろうとしている。St. Peterが冷静に客観的に両者の言い分を判断しようとする理由が、妻Lillianがわずかな収入によって対面を保っていたのと同じく、自らの力によって名声と富を手にいれて世俗的な災いから逃れられる立場に彼が居るからだ単純に考えることは避けたい。

St. Peterは全8巻からなる*Spanish Adventure*を完成させた。

With the fourth volume he began to be aware that a few young men,
. . . were intensely interested in his experiment. With the fifth and sixth,
they began to express their interest in lectures and in print. The two last
volumes brought him a certain international reputation and what were called
rewards—among them, the Oxford prize for history, with its five thousand
pounds, which had built him the new house into which he did not want to
move.(23)

これは長い年月をかけて執筆を続けた努力に対して正当な評価がされた過程を示した描写であるが、彼の業績については次のように説明されている。

If the last four volumes of “The Spanish Adventures” were more simple and inevitable than those that went before, it was largely because of Outland. . . . By the time he had got as far as the third volume, into his house walked a boy who had grown up there, a boy with imagination, with the training and insight resulting from a very curious experience. . . .
(234)

“. . . along came Outland and brought him a kind of second youth.”(234) と Tom は St. Peter に第 2 の青春を与え、彼の著作の完成を動機づけるものになり、彼の生活が Tom の存在によって支えられていたことが読み取れる。

St. Peter にとって Tom は実在の人物であり、Tom そのものが愛する対象であり彼の人生なのである。Tom に触発されて完成した力作は彼に富をもたらした。しかし、それから得られた名誉や報酬はアウトランド式エンジンからの富と同様に彼の求めるものではなかった。St. Peter にとって Tom と時間を共有して書き上げた過程こそが、彼の人生で最も価値のあるものとなった。Tom の戦死によって、St. Peter は、もはやこの世の中で自分がなすべき事がないこと、かつては持っていた“heart” “mind” そして“imagination”(234) を失ったことに気がついた。自覚した妻への愛情の喪失とともに、生きながらえる感情を無くした St. Peter にできることは、Marsellus や Rosamond の行動、そして同時に彼らに敵意をみせる Kathleen やその夫 Scott McGregor に対して、常に一定の距離をもって接することであった。読者はこうした St. Peter の距離感に歯痒さを感じながら物語を読み進めていくのであるが、Tom が戦地へ出かけてあっけなく戦死してしまった不条理を歪めないものと理解してしまうのと同じように、生きる希望を失った St. Peter が、屋根裏部屋で充満するガスの中で横たわるその心情をぼんやりと納得してしまうのである。説明しきれない曖昧な事実は、そのまま姿をかえることなく、曖昧な物に包まれて曖昧に理解されていく。

III

同じ年に発表されたからという単純な理由で Cather の *The Professor's House* と F. S. Fitzgerald の *The Great Gatsby* を比較することは無謀であるかもしれない。主人公の生き様やテーマは双曲線を描いている。しかし、強引にもその共通点を見つけるとするならば、「戦争と富」と言える。*The Great Gatsby* の語り手 Nick Carraway が見つめる Gatsby は、20 年代を象徴するアメリカの姿である。一攫千金により富を得て時代の先端を走っていく姿は、

狂乱の時代を象徴し、そして狂乱の時代の終わりを予告している。Nickは自分の視点を“... the intimate revelations of young men, or at least the terms in which they express them, are usually plagiaristic and marred by obvious suppressions. Reserving judgments is a matter of infinite hope.”²⁰⁾という理由で、歪められてないものとするために定めると語っている。東部での怒濤の波に巻き込まれながら出会ったGatsbyを歪み無く見つめ直し語るというスタンスで、Nickは一人称でGatsbyの物語を語るが、彼の語りによって時代や人物の曖昧性を払拭することはできていない。その第一の理由が戦争である。

Nickは“... I participated in that delayed Teutonic migration known as the Great War. I enjoyed the counter-raid so thoroughly that I came back restless.”(*Gatsby* 6)と戦争で浮き足立つ自分の姿を説明している。Gatsbyとの出会いでも、戦争は一つの尺度と使われている。

“Then came the war, old sport. It was a great relief, and I tried very hard to die, but I seemed to bear an enchanted life. I accepted a commission as first lieutenant when it began. . . I was promoted to be a major, and every Allied government gave me a decoration—even Montenegro, little Montenegro down on the Adriatic Sea!”(*Gatsby* 53)

そして、NickのGatsbyに対する不信は“My incredulity was submerged in fascination now;”(*Gatsby* 53) と、Gatsbyが戦争体験を述べることで払拭された。

Gatsbyは勲章を持ち歩き、自分のアイデンティティを戦争によって証明しようとしている。密造酒や市場で莫大は富を築いたことも、そして出身大学も家柄もすべて曖昧に戦争とともに語られて、客観的な説明は成立していない。誰も信じていたわけではないが、しかし、すべてが真なのか偽なのかわからなくなっている。目の前にある富だけが現実であり、人々はその現実の富に群がるようにGatsbyに催すパーティに訪れる。

嘘で固められた虚像の世界を外観しながら、NickはGatsbyの“a romantic readiness”(*Gatsby* 6) にその価値を見いだしている。NickはGatsbyのDaisyへの愛が虚像の世界において唯一非形而的存在であると考えている。しかし、そうなのであろうか。軍服という鎧をまとったGatsbyはDaisyと恋に落ちる。Daisyもその幻のすがたに囚われて彼との未来を夢見るのであるが、戦争終結によって軍服の幻は消えた。現実の富をもったTom Buchanansと結婚するDaisyに、当然ながら物質的満足以外のものは存在しない。形あるものでしかDaisyに認められないことに対して憤然とGatsbyは挑み、どん欲にその夢をつかんでいく。金によって作り上げられた虚像は再度Daisyの満足感を満たしていく。Gatsbyの絹のワイシャツに顔を埋めながら泣くDaisyの姿は、その姿を象徴している。

強かな Daisy とは反対に、Gatsby の彼女への想いはあまりにも幻想的である。栈橋で緑の灯を見つめる Gatsby の姿は最後まで Gatsby の Daisy への想いを表しているが、緑の灯はともり続けることはなかった。戦争が作り上げた虚像の世界を平時に継続して持ち続ける唯一の手段は富であろうことは、Gatsby の物語からも明らかである。しかし、あくまでも虚像は虚像でしかなく、緑の灯にすぎなかった。夢と富を求めて東部に向かった Nick は、戦後の虚構の世界の中で Gatsby に出会い、彼の拭いきれないロマンによって時代の波から取り残されていく。

“...he was content to be alone—he stretched out his arms toward the dark water in a curious way”(Gatsby 20) と Daisy の住む家を対岸に見ながら大きく両手をのぼす Gatsby は、実現可能と思われた夢を掴みそこなった。確かに目の前にあったと思ったものが遥か彼方、いや現実でなかったことを Gatsby は最後まで信じることはなかったのかもしれない。それを側で見ていた Nick は実際に見ていた Gatsby の富と夢の実現を逆に忘れる事ができず、その想いを何処にぶつけていいのわからなくなっている。New York を離れる前に、彼は Tom Buchanan に会った。

I couldn't forgive him or like him, but I saw that what he had done was, to him, entirely justified. It was all very careless and confused. They were careless people, Tom and Daisy—they smashed up things and Creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness, or whatever it was that kept them together, and let other people clean up the mess they had made. . . .(Gatsby 142)

自らの基準の中でその身を守りながら生きる Tom や Daisy のような人々だけが生き延びることができる東部から、Nick は西部に戻っていった。彼はまだ常時を異常と気づくことでできる西部で “boats against the current, borne back ceaselessly into the past” (Gatsby 144) と流れに逆らうようにして生きていくことを選択しそして Gatsby の物語を語っているのである。

Nick は何のために Gatsby の生き様を語っているのだろうか。自分が唯一の証人であることを Nick は自覚しているが、彼の死によって戦争時の Gatsby の華々しい軍歴もそして豪華なパーティの存在も証明することはできなくなっている。Nick の記憶だけが Gatsby の生きた証であるが、一方でそれも緑の灯と同様に幻ともいえる。ただ一つ、Gatsby という人物を証明する物は彼の父が持参した Gatsby の日記である。

本の裏表紙に綴られたかれの日記には、1902年9月12日の彼の一日の“SCHEDULE”(Gatsby 137)と“GENERAL RESOLVES”(Gatsby 138)が書かれていた。Benjamin Franklin の Autobiography を彷彿とさせるこの記録は、彼が American Dream を信じ掴もうと夢見てい

たことを証明している。少年の夢はその努力と知恵によって実現することができたかもしれない。しかし、Nickの記憶の中に存在する成長した少年の姿は、異常な環境と思想の中で膨大に膨れ上がり、いびつな虚像となっていったのである。そのもとになった素朴な夢をNickが知る事になり、彼のGatsbyの物語は始まったのかもしれない。Nickはその語りの中で、「もしGatsbyが生きていたならば」という言及をしていない。それは時代によって作り上げられたGatsbyのいびつな虚像を語ることで、Nick自身がこの時代を認識し、彼の進むべき方向性を見だし生き抜く事ができたからかもしれない。NickはGatsbyを語ることで、時代やDaisyやTomに対する抵抗をみせたわけではなく、これによって自分が生き抜いていくという決意を述べていると考えることができないであろうか。

IV

NickがGatsbyの死を受け入れ前に進んでいるのとは異なり、St. Peterは“*And suppose Tom had been more prudent, and had not gone away with his old teacher?*” “. . . had he live, . . .” (236) とTomが生きていればと想像する。それは、Tomの死を受け入れることができない証拠でもある。Tomは“*He had no time to communicate his discovery or to commercialize it—simply bolted to the front and left the most important discovery of his time to take care of itself.*” (30) とただ時間がなかっただけであり、商業ベースに彼の発明をのせる事も可能であると考える一方で、“*He had escaped all that. He had made something new in the world—and the rewards, the meaningless conventional gesture, he had left to others.*” (237) と、St. Peterによって理想化されたTomが生きていれば現実を変えてことができたと嘆いている。戦死したTomは自分の意図する行動をしたであろうと信じているのである。

戦死したTomの存在を肯定するこの行為は、すなわちMarsellusの存在の否定であり、現在の生活の否定を意味する。つまり、TomとMarcellusは同じ空間に存在しないため、TomとSt. PeterそしてMarsellusとSt. Peterの時間は次元を異にし、St. Peterは戦死したTomと生きる事、そしてMarsellusとの時間においては自らの死を望むのである。この二人がSt. Peterの生き様に影響を及ぼしていると考えるならば、二人にはどのような違いがあるのだろうか。

当然Tom OutlandとLouie Marcellusが同じ空間に存在しないため、GatsbyとTom BuchanansがDaisyを取り合いように、二人がRosamondを巡って争うことはないが、同じ空間にいないものの、TomもMarsellusも同世代の若者であり、そしてRosamondという同じ女性を愛した共通点をもっている。またSt. Peter一家の中でも二人は共に饒舌に話をしてそして彼らを楽しませている。気難しいSt. Peter夫人でさえもこの二人に対して好意をいただいている。St. Peterを泳ぎに誘い、そして旅行へと誘い、そしてSt. Peter自身もそれを受

け入れている。そして、二人はそれぞれSt. Peterの娘へ宝石を贈っている。

“These I would like to give to the little girls.” In his palm lay two lumps of soft blue stone, the colour of robins’ eggs, or of the sea on halcyon days of summer.

The children marvelled. “Oh, what are they?”

“Turquoises, just the way they come out of the mine, before the jewelers have tampered with them and made them look green. The Indians like this way.”(102)

Tomはトルコ石の原石を、Marsellusはエメラルドの指輪を贈る。

“... I’ve never given her any jewels. I’ve waited all this time to give her there. To me, her name spells emeralds.”(62)

宝石の価値の違いはあるもののこの二人の行為は、女性を喜ばすという基本的なものでありその意図するものは変わらない。このように、Tom とMarsellusの行為をみると両者に違いはない。

そして、贈物があると伝えたその時のSt. Peter夫人の反応も、Tom、Marcellusに対して同じである。

Again Mrs. St. Peter demurred. She told him very kindly that she couldn’t let him give his stones to the children.“They are worth a lot of money.”(102-03)

“Of course emeralds would be beautiful, Louie, but they seem a little out of scale—to belong to a different scheme of life than any you and Rosamond can live here. You aren’t, after all, outrageously rich. When would she wear them?”(61-62)

母は、娘にとって不相応な物が何であるのかを適正に判断している。St. Peter夫人は義理の息子のMarcellusを気に入り、その心憎いばかりの心遣いに満足し、そしてそれをさらに助長しているかのように思われている。そのため夫の成功によって金銭的に恵まれたことで彼女の判断や価値観が狂ってきたと夫のSt. Peterは考えているが、この夫人の言葉は夫が考えるほど価値基準は常軌を逸するものではないことがわかる。MarcellusとSt. Peter夫人は物欲的

欲求を財力でもって満たしていく俗物の代表のようにとらえられているが、逆にSt. Peterの方が時代に載れず何かにしがみついていることによって価値判断がぶれてしまっていると考えられる。

今一度、*The Professor's House* がSt. Peterが新しい家への引っ越しを拒否することから始まっていることに注目したい。

The moving was over and done. Professor St. Peter was alone in the dismantled house where he had lived ever sine his marriage, where he had worked out hi career and brought up his two daughters.(3)

彼は結婚以来生活し、教授として成功し二人の娘を育てたこの古い家に執着しているのである。もちろん、Tomが訪れたのもこの古い家であり、Tomとの思い出が染み付いている場所であるが、彼がこの家に執着しているのはTomとの思い出だけではない。この家は結婚以来のSt. Peterの人生そのものである。不便な家を修理しながら住み続けたこの家には、教授としての体面を保つであろう“a show study”(8)があった。蔵書がおさめられた書棚と立派な机が置かれたこの「本物ではなかった」書斎を彼はずっと受け入れてきた。それは彼の本当に居場所がこの家の中にあったからに他ならない。彼にとってこの家の居心地のよい場所とは、裏庭に自ら作った“French Garden”(6)と三階にある“cuddy”であった。

The Professor had succeeded in making a French garden in Hamilton. There was not a blade of grass: it was a tidy half-acre of glistening gravel and glistening shrubs and bright flowers. . . .The French marigolds and dahlias were just now at their best—such dahlias as no one else in Hamilton could grow. St. Peer had tended this bit of ground for over twenty years, and had got the upper hand of it.(6)

“His walled-in garden”は彼に生活の楽しみを与えていたが、彼の思いとは別に、“it was the one thing his neighbours held against him”(5)と隣人達には受け入れられるものではなかった。彼の居心地のよい場所は他の人々に受け入れられていないことは興味深いものである。そしてその庭にすることで、彼は春に旅行に出かけたくなる気持ちや、仕事に対する苛立ちや不満をこの庭で解消している。窓から見える湖は彼の幼少時代の思い出を蘇らせ、彼はその眺めで平常を取り戻し穏やかな生活をおくる。窓から見える景色によって現実回避をするSt. Peterだが、それは常に囲まれた世界であり、庭は窓枠に覆われた絵でしかない。そして庭を創作することでSt. Peterは満たされない人生の実感を得ようと思っていたが、庭の創作は彼に創作する気分を与えるだけであり、フランス風庭園は決してフランスの庭園ではなくフェイ

クな存在なのである。しかし、彼はそれに気がついておらず、自らの手で創作された「フランス式庭園」に満足している。

St. Peterがもう一カ所の心の拠り所である仕事場として使用している屋根裏部屋も、家の中で最も閉鎖的な空間である。低い天井が三方に傾斜し、その東側の斜面の途中に一つの四角い窓があった。最上階の窓から見下ろし、子供時代の思い出の風景をながめて居心地のよさを感じているが、高みから窓の外を眺める彼の姿は、彼が夢を求めて遥か遠くを眺める孤独な男であることを示していると同時に、子供時代の思い出の風景をながめて過ぎ去った日々理想を求める排他的な人物であることを示している。

From the window he could see, far away, just on the horizon a long, blue, hazy smear—Lake Michigan, the inland sea of his childhood.(20)

窓から見える湖のその“blue water”は彼に安らぎをもたらした。“...the great fact in life, the always possible escape from dullness, was the lake”(20) と、湖、水は St. Peter に心の平安を与えた。閉鎖された世界の中で生活を送っている St. Peterにとって“water”は現実の生活を自ら浄化することができるものであろう。*The Professor's House* と同じ時期に執筆された W. Faulkner の *Mayday* も同様に、“water”による心と感情の浄化が描かれている。息苦しい実生活を水によって浄化しリセットするという発想が Cather にもあることがわかる。²¹⁾

窓から見える湖以外に、この部屋に St. Peter が居心地の良さを感じているのは、彼がこの部屋を Augusta と共有しているところである。

Since Augusta finished her day's work at five o'clock, and the Professor, on week-days, worked here only at night, they did not elbow each other too much. Besides, neither was devoid of consideration.(8)

糸屑一つ残さない Augusta の心遣いに報いるためにも、St. Peter もタバコの灰などに気をつけ、二人は互いに気を使いながらこの部屋を共有していた。部屋には妻や娘達の衣装を作成する際の道具や洋裁に使用する“forms”(9)が2体置いてあった。一体は Augusta が“the bust”(9)と呼ぶ黒い木綿地で覆われた顔も腕もない女性の胴体であり、そしてもう一体は足はないが金属製のウェストラインがつき針金のスカートをはいた等身大の女性の像であった。これらの“forms”は部屋に不可欠な存在であり、Augusta がこれらを選びだそうすると、St. Peter は“What are you doing?”(10)と激しく抗議した。

“. . .I can't have this room changed if I'm going to work here.
He can take the sewing-machine—yes. But put her back on the
chest where she belongs, please. She does very well here.”(12)

St. Peterが“she”と呼ぶ手も頭もない洋裁用「ボディ」(form)は彼の仕事には何も関係がないが、かれはその“she”とともに時間を過ごし仕事をしてきた。さらに、“she”には、妻や娘達の新しく仕立てられた服が着せられていた。手も足もない“she”は、洋服が着せられると彼の愛する家族になり、そして手も口も出さない“she”の存在は、閉鎖的空間に一人いることを望みながらも自分に寄り添ってくれる物を切望している彼の望みを満たした。生きている妻と共にいる事を拒否する一方で、共有を許されたのは、物である“forms”とそしてAugustaの影であった。

かたくなに閉ざされた空間にいることを望むSt. Peterが、なぜAugustaに対してフランクに自分を語りそして空間を共有したのであろうか。

. . .August, the sewing-woman, niece of his old landlord, a reliable,
methodical spinster, a German Catholic and very devout.(8)

未婚で敬虔なクリスチャンであるAugustaを、St. Peterは“reliable”と信頼している。激動の社会の中で静かに自らの生活を送っているAugustaにSt. Peterが心を許していることは、彼が今の社会中で手に入れられない物を彼女が持っていることを示している。

Janis Stoutは*The Professor's House*に描写される物は“the purchaser”²²⁾の物であると述べている。特に、Rosamondの持ち物、そして、夫Marsellusが商品化したTomの発明は、彼ら“the purchaser”によって価格によって価値が判断されている。一方St. Peterは自らを“the purchaser”ではなく“the maker”と考えている。*Spanish Adventure*の執筆、フランス式の庭を作る事、彼は“the maker”として自分を認識して、まさしく“the maker”であるAugustaに相通じるものがあると彼は感じて“reliable”という信頼感を生み出したと考えられないだろうか。そしてSt. PeterはTomも“the maker”として認識している。“the maker”同士の信頼を信じているSt. Peterであるが、それは彼の思い込みであり、彼は“the maker”“the purchaser”のどちらにも属さないものだと考えられる。

ヨーロッパ旅行に出かけているRosamondの懐妊の知らせと共に、妻と娘夫婦が帰国するという知らせを受けた夜、St. Peterは最上階の書斎の机前に座り、“reviewing his life”(251)と、自分の人生がどこで過ったのか、そしてなぜ自分が愛するものから逃げ去りたいと考えているかの理由を明らかにしようとしていた。その時、St. PeterはAugustaがこの部屋に上がってこないかと恐れていた。“. . .just now he did dread her.”(251)“the maker”のAugustaが自分を決して放置し見放さないことを彼は知っていたのだ。このまま何もせずに眠りにつく

ことを望みながら, Augustaによって充滿するガスの中から助け出され命拾いしたSt. Peterは,

It occurred to St. Peter, as he lay warm and relaxed but undesirous of sleep, that he would rather have Augusta with him just now than anyone he could think of. Seasoned and sound and on the solid earth she surely was, and for all her matter-of-factness and hard-handedness, kind and loyal. He even felt a sense of obligation toward her, instinctive, escaping definition, but real. And when you admitted that a thing was real, that was enough—now.

(156-57)

Augustaの暖かみに包まれ救われたと感じた。“watching and sitting up with people”(255)と洋裁をしながら幾人もの病人を見守りそして見送っていったAugustaは“the maker”として常に命を紡ぎ続け、そしてSt. Peterをこの世に残した。皮肉にも“the maker”によって命を救われたSt. Peterは“the purchaser”の世界に戻されたのである。

一時的に意識を失ったことでSt. Peterは“He had let something go—and it was gone.”(258)とこの世のしがらみをすべて捨て去る事ができたと感じた。家族がヨーロッパから戻り彼らとともに過ごしても、自分の在るべき場所“where he was”(258)を確信したSt. Peterにとって、何も恐れるものはなかった。彼はTomの残した日記に“to annotate the diary that Tom had kept on the mesa”(238)注釈をつける仕事に没頭できると考えたのである。Tomの日記はBlue Mesaでおこった事柄や見つかった物についての詳細な記録であった。彼はこのシンプルな描写にTomの想像力と熱情を付け加えようとしたのである。“Tom Outland consequently embodies St. Peter’s main temptation. . . .”²³⁾ St. PeterにとってTomの存在は彼の夢そのものであり、日記に注釈をつけることで彼とともに夢の世界に住めると考えた。それはまるでTomの青春時代を自らの手で再現し再生する“the maker”の役割をSt. Peterが果たそうとしているかのようである。

作品を読み終えた時に読者はSt. Peterは救われたのだと感じる。これ以上何にも惑わされる事無くSt. Peterが心安らかな余生を送ることができると考えるべきなのであろうか。いや、結局、彼は囲まれた世界から出る事もできず、そして家族からも解放されることはないのではないか。“If his apathy hurt them, they could not possibly be so much hurt as he had been already.”(258)と“them”, 彼の周りにいる人々、つまり“the purchasers”は彼の変化に気がつくことがなく、その中で彼は生きていかななくてはならない。それを認識した上でSt. Peterは“the purchaser”の中で密かに“the maker”になることを意図している。しかし、立ち向かう覚悟を決めたSt. Peterは、自分が閉鎖された空間の中で思い出を紡ぎ直す者でしかないことに気がついていない。思い出を紡ぎ直すことは“the maker”ではない。なぜなら

ば、“the purchaser”の世界において、St. Peterが紡ぎ出す物は、商品価値がないからである。つまり、St. Peterの考える“the maker”はもはやこの時代には“the maker”として認められないのである。

V

第一次世界大戦終結後、ウィルソン大統領は指導権をさらに強固なものにすべく活動するが、ボルシェヴィストの陰に怯えこの先極端な方向へ国が傾いていくのではないかという疑念は、国民をヒステリー状態に導いていった。ウィルソン大統領からハーディング大統領への政権交代は、「常態」と「安静」の必要性を感じた国民の意志を示すものであった。人々は次第に常態を取り戻し、景気や科学技術の発展に裏付けられた1920年代がやってきたが、この時代をいわゆる「狂乱の時代」としたのは、社会主義でも愛国主義でもなく、ボルシェヴィストも理解できない裕福な家庭の若者達であった。“It was an age of miracles, it was an age of art, it was an age of excess, and it was an age of satire”²⁴⁾と評される20年代に若者達は、アメリカの「道徳律」を崩していった。政治的「常態」を目指したアメリカは、道徳的「異常」を修正できないまま1929年10月24日の“the Great Depression”を迎えたのである。²⁵⁾戦争直後の喪失と希望から始まり、若者の異常は次第に各世代に浸透していった。“May one offer in exhibit the year 1922! That was the peak of the younger generation, for though the Jazz Age continued, it became less and less an affair of youth.”²⁶⁾と1920年代は、アメリカの人々と彼らの常態を根底から変えていった。そして幻のような20年代が終わった時、物質的成功をおさめたアメリカ社会は世界へと羽ばたきながら、その社会を支える人間がそれと共に崩壊していった。その姿をS. F. Fitzgeraldは“The Eco of Jazz Age”(1931)で次のように描写している。

By this time contemporaries of mine had begun to disappear into the dark maw of violence. A classmate killed his wife and himself on Long Island, another tumbled“accidentally” from a skyscraper in Philadelphia, another purposely from a skyscraper in New York. One was killed in a speak-easy in Chicago, another was beaten to death in a speak-easy in New York and crawled home to the Princeton Club to die, still another had his skull crushed by a maniac’s axe in an insane asylum where he was confined. There are not catastrophes that I went out of my way to look for—these were my friends’sstories; moreover, these things happened not during the depression but during the boom.²⁷⁾

繁栄の中で人間が壊れていく姿は、アメリカという国がその姿を大きく変えたことを示している。

The Professor's House の中で、Catherは二つに分裂した世界をSt. Peterの姿を通して表現している。St. Peterが体験した戦前・戦後の価値観の変化は、Tomの死と重なり、彼に時代を実感させ、そして己のスタンスを自問させた。元々、American Dreamと個人の努力による立身出世が伝統的なアメリカ個人主義精神であると考えられていたアメリカにおいて、戦争は多くの人々にその機会を与えたと言える。急激な経済発展に追随できる者だけが社会の「適合者」として認められていくというこの体制は、戦争を境に加速し、そして「異常」な度を超した個人主義と物質主義は、時代とともに常時となっていった。経済の発展は産業と消費の社会を形成し、そしてそれはアメリカ全土に拡充していった。

戦争自体の価値を問われることもなくなり、戦後土地や地域に根付いた思想や社会構造は画一化されていき、生産と消費による満足だけが人々に生きる実感を与えていった。1925年に発行されたCatherの*The Professor's House*とFitzgeraldの*The Great Gatsby*はともに戦争後の“ability of individuals”がテーマの一つであるといえるが、Gatsbyの死後Nick Carrawayは“genealogical connection”²⁸⁾に救いを求めて西部に帰っていく一方で、St. Peterは“exile”となることも“genealogical connection”も手にいれることができない。

*The Professor's House*の1章にSt. Peterの次女Kathleenが子供の頃描いた父の水彩画の描写がある。戦前にKathleenが描いたSt. Peterの水彩画には、

That part of his head was high, polished, hard as bronze,
and the close-growing black hair threw off a streak of light
along the rounded ridge where the skull was fullest. The mould
of his head on the side was so individual and definite, so
far from casual, that it was more like a statue's head than a man's.(5)

と、時代に流されず自らの利点を主張できる彼の姿が見事に描き出されている。St. Peterも認める才能をもっていたKathleenは、Rosamondの物質的成功に抵抗しながらも、“the maker”としてのその力を失い成功と富に毒されていく典型的な人物になっていった。そして生きることに関心を感じていた当時の父St. Peterの姿は、すでに“statue”であったことが当時の“the maker”，Kathleenの水彩画で明らかになっている。彼女の水彩画の価値を認めるのは今ではSt. Peterだけになり、そして皮肉にもSt. Peterは“the maker”にも“the purchaser”にもなれないのである。生きる世界を奪われ、変化した世の中に対応できないSt. PeterはKathleenの描いた彫像の姿でしか存在することができなくなった。

アメリカは戦争を機会に新しい社会を形成した。“A newly created institutional matrix of business corporation”²⁹⁾がアメリカの母体となり、新しいアメリカの体制は、科学技術の

発展と経済的繁栄を統合して軍事的発展を含めたアメリカ社会の繁栄を目指したと Oliver Zunzが述べているが、こうした社会の中で、かつてアメリカを作り、アメリカに夢を与えていた“the maker”の価値は、常に“the purchaser”の判断によって評価されるものになった。Tomの人生を奪った戦争は、“one great catastrophe”(236)として人々に真偽の曖昧さをもたらし、価値観を根底から覆してしまった。真の小説は、“throw all the furniture out of the window”³⁰⁾であるべきだと Catherは述べている。*The Professor's House*において Catherは戦闘をリアルに描くことで戦争による価値観の破壊を示さず、あえて戦争を描かないことで戦争の持つ破壊力とその危機感を強く呈示したのだ。“...he could face with fortitude the *Berengaria* and the future.”(258)と作品はSt. Peterに未来に立ち向かう覚悟を自覚させて終わっている。第一次世界大戦の終結、そして“the world broke in two in 1922 or thereabouts”と世界は大きな変革を遂げた。その波に飲み込まれたSt. Peterや Nick Carrawayが覚悟を決めたように、Catherもそして世界もその進むべき方向を見極めた。そして、1925年はその覚悟の意思表示の時になった。

註

1) Julie Olin-Ammentorp, “Willa Cather’s *One of Ours*, Edith Wharton’s *A Son at the Front*, and the Literature of the Great War,” in *Willa Cather: A Writers Worlds, Cather Studies* 8 (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 2010), p.125.

2) Julie Olin-Ammentorp, “Willa Cather’s *One of Ours*, Edith Wharton’s *A Son at the Front*, and the Literature of the Great War,” p.125.

3) Edith Lewis, *Willa Cather Living: A Personal Record* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 2000), p.77.

4) Edith Lewis, *Willa Cather Living: A Personal Record*, p.85.

5) Edith Lewis, *Willa Cather Living: A Personal Record*, p.117.

6) Steven Trout, *Memorial Fictions: Willa Cather and the First World War* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 2002), p.2.

7) Steven Trout, *Memorial Fictions: Willa Cather and the First World War*, p.3.

8) Steven Trout, *Memorial Fictions: Willa Cather and the First World War*, p.4.

One of Ours は“as a bad twentieth-century war novel”[Richard C. Harris, “Pershing’s Crusaders’: G.P. Cather, Claude Wheeler, and the AEF Soldier in France,” *Willa Cather: A Writers Worlds, Cather Studies* 8, p. 75.]として多くの作家や批評家から批判される。批判的な批評の代表はH. L. Menckenであるが、彼はその他のCatherの作品に対しては好意的な批評が多い。Catherの戦争についての捉え方に対する論争は、以下の資料に言及されている。cf. James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life*

(Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1987), pp.192-193, p.333., Merrill Maguire Skaggs, *After the World Broke in Two: The Later Novels of Willa Cather* (Charlottesville : Univ. Press of Virginia), p.3, p.5.

9) James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1987), p.330.

10) Jean Schwind, “The ‘Beautiful’ War in *One of Ours*,” *MFS* Vol.30 (Spring 1984), p.53.

11) William Faulkner, *Sartoris* (New York : New American Library, 1958), p.34. 南部における南北戦争の認識を Faulkner は Old Bayard の視点を通してこのように表現している。

12) L. Brent Bohlke (ed.), *Willa Cather in Person* (Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1986), p.78.

13) Edith Lewis, *Willa Cather Living: A Personal Record*, p.122.

14) Willa Cather, *Prefatory Note to Not under Forty* (New York : Alfred A. Knopf, 1988).

15) William Faulkner, *Sartoris*, p.50.

16) Edith Lewis, *Willa Cather Living: A Personal Record*, p. 137.

17) Willa Cather, *On Writing* (Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1988), p. 30.

18) Alfred Kazin, *On Native Grounds* (New York : Reynal & Hitchcock, 1942), p.255.

19) Willa Cather, *The Professor's House* (New York : Vintage Classic, 1990), p.3. *The Professor's House* についての言及はすべてこの版によるものとして、以後引用の後に頁数を記す。

20) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (Oxford : Oxford Univ. Press, 2008), p.5. *The Great Gatsby* についての言及はこの版によるものとして、以後引用には (*Gatsby*, 頁数) を記す。

21) William Faulkner の *Mayday* は恋人 Helen に捧げる “fairy tale” として 1925 年に構想された。この作品は当時アメリカで最も人気のあった James Branch Cabell (1879-1958) の *Jurgen* (1920) の構成、語り、テーマそして技法を取り入れた作品である。Sir Galwyn が理想の女性を求めて旅にでるが、何も手にいれることができず、最期は Time, Hunger, Pain に促されて、The Lord of Sleep に導かれるように川に入り自殺する。水によってすべての感情が浄化されそして心の平安を得ることができるという物語である。

22) Diane Prenatt, “Art and the Commercial Object as Ekphrastic Subjects in *The Song of the Lark* and *The Professor's House*,” in *Willa Cather and Modern Culture, Cather Studies* 9 (Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 2011), p.220.

- 23) Stephanie Durrans, "The Temptation of St. Peter: Flaubert's *Saint Anthony* and Cather's *The Professor's House*, in *Willa Cather: A Writers Worlds, Cather Studies* 8 (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 2010), p.183.
- 24) F. Scott Fitzgerald, "Echoes of the Jazz Age" *Scribner's Magazine*, Vol. XC, November, (1931), p. 460.
- 25) cf. Frederick Lewis Allen, *Only Yesterday: An Informal History of the 1920s*, (New York: Modern Classics, 2010), pp.76-89.
- 26) F. Scott Fitzgerald, "Echoes of the Jazz Age," p.460.
- 27) F. Scott Fitzgerald, "Echoes of the Jazz Age," p.460.
- 28) Kelsey Squire, "Jazz Age' Places: Modern Regionalism in Willa Cather's *The Professor's House*," in *Willa Cather and Modern Culture, Cather Studies* 9 (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 2011), p.52.
- 29) Olivier Zunz, *Why the American Century?* (Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1998), p.xi.
- 30) Willa Cather, "The Novel Demeublé," *Great Short Works of Willa Cather*, Robert K. Miller(ed.), (New York: Harper & Row, Publishers, 1983), p.329.